

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 1日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520333

研究課題名（和文） ドイツ近代とヘルメスの伝統についての研究

研究課題名（英文） Study on the hermetic tradition in the German literature of the 18th and 19th Century

研究代表者

坂本 貴志 (SAKAMOTO TAKASHI)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：10314783

研究成果の概要（和文）：ヘルメスの伝統の思想的な核心が、世界、自然、あるいは宇宙全体を唯一神の無限に多様な表出と見る考え方にあることを明らかにした。ルネサンスの末期に起こった宇宙観の革命は、ヘルメスの伝統に新たな展開の可能性を与えた。その具体的な展開は、もはやヘルメスの伝統の名前で呼ばれることはなかったが、思想的な核心を継承しつつ、ドイツ近代においてもなされた。批判期前のカント、レッシング、ゲーテ、シラー達は、宇宙を含む世界全体とその中に生きる人間存在を総体的に了解しようとして、この伝統を新たに変奏した。

研究成果の概要（英文）：This research gives the recognition that the core thought of the hermetic tradition is considering the whole world, the nature or the space to be an endlessly various expression of the one God. On the other hand the revolution in the cosmology in the late renaissance period gave this tradition a possibility for the new development. Though this development does not called by the name of the hermetic tradition, but it remains to hold the core thought. Kant before the criticism, Lessing, Goethe, Schiller and so on want to understand the man within the nature totally and contribute to reform this tradition.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ヘルメスの伝統（ヘルメス主義）、ドイツ近代、シラー、ゲーテ、カント

1. 研究開始当初の背景
ヨーロッパの近代は、バロック期の終わりか

らフランス革命の前頃までが基本的には啓蒙主義の時代と呼ばれ、この時代は理性を何

よりも重視することによって、人間中心主義、主体の自由と快楽の追究、合理主義、機械論、宗教的支配の後退といった、今日の世界にも影響を及ぼしている様々な考えを生み出したとされる。こうした時代には、「神的なるもの＝神性」を巡る人びとの思考もまた根本的に変容したとの予想のもとに、「ヨーロッパ近代における神性の変容」と題する研究を、科学研究費による補助（若手研究B）を受けて平成17年度から19年度にかけて行った。その結果得られたのは、そもそも啓蒙主義近代に関する上記一般的見解が時代の評価として不充分であるとの認識である。ヴィーラントは1781年に「大多数の人間にある迷信と狂信が、ごく少数の人々の啓蒙と同じ歩調で歩んでいる」と述べており、そしてこの「大多数」の人びとは、「神性」を巡っては、錬金術や降霊術、動物磁気、観相学などといった、オカルトあるいは神秘的な世界に対する「迷信と狂信」にとらわれて、時に秘密結社の中でこうした関心をさらに醸成していたという事実が明らかになった。この観点から、哲学者カント、あるいは文学者フリードリヒ・シラーのような18世紀の代表的な知識人でさえもオカルトへの関心をもち、それが彼らの思考形成に根本的な意義を持つことが判明した。その後の研究において、オカルトに対するカント、シラーの関心は、ヘルメスの伝統、あるいは新プラトン主義と呼ばれる、ヨーロッパの思想と文化に古典古代以来系譜的にある一種の神秘主義的な哲学的宗教的な伝統に基本的に棹さしているとの認識に到達した。本研究はドイツ近代とヘルメスの伝統との関わりを明らかにしようとする。

2. 研究の目的

本研究は、ヘルメスの伝統のドイツ近代（18・19世紀）における影響を明らかにすることを目標とする。ヘルメスの伝統は、古典古代期以前にその源泉をもち、キリスト教の教義の成立とも関わり、中世を通じて半ば秘教的に伝承され、ルネサンス期の芸術と思想に根本的な影響を与え、またそれ以降の時代にも連綿と引き継がれて魔術など様々な文化的現象を付随させてきた、ひとつの宗教的かつ哲学的な潮流である。このヘルメスの伝統の、地中海世界古代期とルネサンス期における思想的内容と文化的現象をそれぞれ明確にしなが、ヨーロッパ近代、とりわけドイツを中心とする地域における思想的文化的側面にこの伝統が与えた影響を、本研究は明確にしようとする。

3. 研究の方法

ヘルメスの伝統の基本的性格を、 α 古典古代期（それ以前をも視野に入れて）において暫定的に明確にする一方、 β ルネサンス期、 γ 近代における神秘主義的思想のそれぞれの基本的性格を、いくつかの主立った文学者思想家のテキストを通して導出し、 $\alpha\beta\gamma$ の各領域における比較研究から共通の部分をヘルメスの伝統として認識すると同時に、この伝統の近代的特点を、 $\alpha\beta$ におけるヘルメスの伝統との差異において際立たせようとする。

4. 研究成果

(1) 古典古代からルネサンス期における伝統の性格：ヘルメスの伝統という概念についてまずひとつ確かに確認されるその特徴は、それが「永遠の哲学 (philosophia perennis)」あるいは「古代神学 (prisca theologia)」という名前で捉えられようとする思考の動きと関わりを持つという点である。「永遠の哲学」とは、ヴァチカンの司書アゴスティノ・ステウコが1540年に刊行した同名の書の中で提起した概念であり、真理の認識と同時に神の崇拜が哲学の本当の課題であり、それが唯一の真理として歴史的に繰り返されてきた現象を指す。「永遠の哲学」は一神教的な神学と哲学的知の探究の一致を目指す精神として理解され、シュミット・ビッグマンによるならば「永遠の哲学」のひとつの形態が「古代神学」である。「古代神学」とは、ダニエル・P・ウォーカーによるならば、もとは偽書に基づくキリスト教的弁明の神学の伝統である。初期の教父たちは、古代の一神教的な神学者であるヘルメス・トリスメギストス、オルフェウス、ピュタゴラスによって書かれたと目された一群のテキスト（ヘルメス文書、オルフェウス文書等）を引用して、異教の哲学者たちに対してキリスト教神学の弁明を行った。ルネサンス期にはまたプラトニズムや新プラトン主義をキリスト教神学の中に統合する試みとして「古代神学」が再興し、その代表としてフィチーノやアタナシウス・キルヒャーの名が挙げられる。「古代神学」とは、一神教的な神学と哲学的知が同一の遙かなる根源から派生するとして、これを上記テキスト群をもとに系譜学的に支えようとする秘教的な学である。ヘルメス・トリスメギストスを教祖に頂き、ヘルメス文書を教典とするヘルメスの伝統もまたこの観点からすれば「古代神学」の一種である。

(2) 近代初期における伝統の危機：ヘルメ

学的伝統の概念を「古代神学」として定義しようとする、しかしルネサンスの終わり以降のこの伝統の性格を考えると問題が生じる。というのも、「古代神学」の依拠するテキスト群は、少なくとも旧約に匹敵する古さと想定されてきたのであるが、実際にはずっと新しいものであったことが後代になって判明した。1614年にフランスの神学者・古典学者アイザック・カソボンがテキスト批判に基づいてヘルメス文書の成立時期を西暦紀元後、古代後期であると確定し、これらの文書がキリスト教的な偽作であると発表して以降、「古代神学」の一つであるヘルメスの伝統を支える系譜学も破綻し、ヘルメスの伝統はもはや素朴には受け止められなくなる。以後ヘルメスの伝統はヘルメス文書とヘルメス・トリスメギストスからは切り離されて、この伝統が本来もった「古代神学」、あるいは「永遠の哲学」としての性格は失われる。そしてこの伝統が持っていた知的遺産は錬金術や魔術的医術や神秘主義者たちに受け継がれる一方、彼らを相互に結びつける哲学的根拠は失われていった。そのため、十八世紀のシラーが自らの自然哲学の性格を表すのに「ヘルメスの伝統」という言葉を用いることはない。フォン・ヴィーゼやリーデルがシラーにおけるヘルメスの伝統との関連を指す場合には、もはや「古代神学」としてのヘルメスの伝統ではなく、神秘主義者の神智学的世界観の中に姿を変えて残ったヘルメスの思考方法を漠然と指している。

(3) 近代期における変容：一方でヘルメスの伝統は、カソボン以後モーセ研究という形に姿を変える。というのも、ヘルメスの伝統に付随していたのは「古代神学」の根源をエジプトにみるエジプト崇拝であり、このエジプト崇拝が、モーセとエジプトとの関連を主題として得て、モーセがユダヤの民に与えた律法と一神教の教えをエジプトとの関わりで明らかにしようとするモーセ研究が一七世紀以降興った。このモーセ研究に連なるのがイギリスのカドワースであり、カドワースは「ヘン・カイ・パン（一にして全て）」の教義がエジプト起源であり、この教義がヘルメス文書の中で主張され、それがまたやはりエジプトを出自とする女神イシスのアレゴリーによって表現されると考える。さらにヘルメスの伝統がルネサンス以後に新たに復興する理由として、宇宙観の革命がある。天動説から地動説への宇宙観の革命がもたらした影響は、科学だけではなく神学にも及び、地動説から不可避免的に導き出された「世界の複数性」という、他の天体上における「人間

存在の可能性は、無限の宇宙のどこか辺境にある地球へのキリストの降臨という、啓示宗教の根幹を疑わしいものにした。複数化された世界の中では、キリストが無限に降臨するか、地球が宇宙における特権的な中心の地位を再び獲得するか、あるいは啓示宗教そのものによって変わる哲学・神学が必要になる。これを受けてむしろ活性化するのが、ヘルメスの伝統が担っていた世界理解のあり方である。神人同形説、存在の連鎖、天球の音楽など、ヘルメスの伝統の中で浮かび上がる世界理解の概念の数々は、あらたに生命を獲得し、複数化した世界を神学的かつ哲学的に説明するための概念として装いを改めていく。

(4) 近代ドイツにおける伝統の性格：ヘルメスの伝統の、近代ドイツにおける新たなる変奏の事例として、シラーの宇宙論的な自然哲学を眺めることができる。そこに読み取れるのは、複数化した世界からなる存在の大きな連鎖という、刷新されたヘルメスの伝統の世界観である。宇宙全体、すなわち自然を神に等しいと見る、スピノザ的な自然観である。あらゆる啓示宗教を真理へと到達するための寓話、ないし過渡的段階とみなす理神論的な立場である。シラーの依拠する世界観は、この意味で、「世界の複数性」についての詩がその創作の最初期に位置し、また「ヘン・カイ・パン」によって晩年の思想を表明したレッシングと立場を共有している。シラーは自らの自然哲学を、ヘルメスの伝統、あるいは新プラトン主義として標榜することはない。だがシラーは、無限の宇宙を統べる神と魂の不死性という、自らの思想の核心を言い表す際にはイシス神のイメージに依拠する（『私は現在有るもの、かつてあったもの、未来に有るだろうもの全てである。死すべき人間が私のヴェールを持ち上げたことはない。』）。「ヘン・カイ・パン」の自然科学的方法による実証可能性についての対話が、ゲーテとシラーの古典主義的協調の出発点にあり、この対話におけるゲーテの立場の継承者としてアレクサンダー・フォン・フンボルトの『植物の地理学の理念』（1807年）を位置づけることができる。

(5) 今後の展望

本研究テーマを通して、さらなる考究の必要性が明らかになったのは次の二点である。

①ヘルメスの伝統の近代の変奏として位置づけられる「宇宙論的神学」の具体的様相とその拡がりについて。

②ヘルメスの伝統の、ルネサンスからドイツ近代への継承ルートの分析。そこに果たしたケンブリッジ・プラトニズムの役割について。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

- ① 坂本貴志、Untersuchung über die Verinnerlichung einer Kultur und deren Übersetzung in eine andere am Beispiel Heines sowie über die Heine-Rezeption Bei der Modernisierung Japans, 印刷中、査読有り。
- ② 坂本貴志、天上界への魂の帰昇と宇宙論—ロンギノスとカントの崇高について—, 山口大学文学会志, 61巻 105-122頁, 2011年、査読無し。
- ③ 坂本貴志、神性の形成—シラーの美と崇高における文化的、思想的背景について—, ヘルダー研究, 16号 67-89頁, 2011年、査読有り。
- ④ 坂本貴志、「非物質の世界のひとつの巨大な総体」というトポス, 19世紀学研究, 5巻 39-54頁, 2011年、査読有り。
- ⑤ 坂本貴志、Die Erziehung des Menschen durch das verschleierte Ägyptenbild -Zur Erhellung der verborgenen Theologie Schillers, 日本ゲーテ協会機関誌『ゲーテ年鑑』, 52巻, 117-132頁, 2010年、査読有り。
- ⑥ 坂本貴志、オルフェウスのバラード—ゲーテ、シラーとヘルメスの伝統—, 19世紀学学会『19世紀学研究』, 4号 107-126頁, 2010年、査読有り。
- ⑦ 坂本貴志、Die Bildung des kollektiven Gedächtnisses— Kant, E.T.A.Hoffmann und Freud—, 立教大学ドイツ文学科論集『アスペクト』, 43号 3-25頁, 2010年、査読無し。
- ⑧ 坂本貴志、Schiller und die Hermetische Tradition, 山口大学紀要『文学会志』, 60巻 117-138頁, 2010年、査読無し。
- ⑨ 坂本貴志、ドイツ近代におけるイシス幻想について—シラー、ゲーテ、アレクサンダー・フォン・フンボルト—, 日本アイヒェンドルフ協会機関誌『あうろ〜ら』, 27号 1-16頁, 2010年、査読有り。
- ⑩ 坂本貴志、Über die neuplatonisch-gnostische Bildung des Menschen — Zur Neuorientierung des Schillerschen Begriffs der Freiheit—, 山口大学紀要『独仏文学』, 31号 29-42頁, 2009年、査読無し。

〔学会発表〕(計9件)

- ① 坂本貴志、Die Mehrheit der Welten und 'Hen kai Pan', 19世紀学会・19世紀学研究所・新潟大学人文学部共催国際シンポジウム「Das Krisenbewusstsein zur Zeit der Romantik und Utopievorstellungen」、2012年2月27日、新潟大学(新潟)。
- ② 坂本貴志、レッシングの「ヘン・カイ・パ

ン」、日本独文学会秋季大会第IVシンポジウム「ロマン主義の時代の危機意識とユートピア」、2011年10月15日、金沢大学(金沢)。

③ 坂本貴志、シラーの自然哲学、日本シェリング協会第20回大会テーマ討論『ゲーテとシラーにおける「自然」』、2011年7月2日、山口大学(山口)。

④ 坂本貴志、ドイツ近代の崇高、日本フランス語フランス文学会2010年度秋季大会ワークショップIII「近代の成立と崇高、2010年10月17日、南山大学(名古屋)。

⑤ 坂本貴志、Untersuchung über die Verinnerlichung einer Kultur und deren Übersetzung in eine andere am Beispiel Heines sowie über die Heine-Rezeption bei der Modernisierung Japans, Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit XII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG)、2010年8月5日、ワルシャワ大学(ポーランド)。

⑥ 坂本貴志、集合的記憶の生成—カントからフロイトへ—、19世紀学会主催シンポジウム『啓蒙主義の時代における神秘主義思想：ヨーロッパ文化のもう一つの思想的潮流』、2009年11月28日、新潟大学(新潟)。

⑦ 坂本貴志、古代の変容と古代への投影—ヘルメスの伝統とドイツ・ロマン主義—、成蹊大学アジア太平洋センター・ロマン主義研究会、2009年11月17日、成蹊大学(東京)。

⑧ 坂本貴志、Über die neuplatonisch-gnostische Bildung des Menschen — Zur Neuorientierung des Schillerschen Begriffs der Freiheit—, 日本ヘルダー学会主催Herder-Kolloquium、2009年10月3日、立教大学(東京)。

⑨ 坂本貴志、イシスの贈り物(近代におけるイシス幻想について)、日本アイヒェンドルフ協会主催研究会、2009年5月31日、明治大学(東京)。

〔その他〕

① 坂本貴志、ゲーテとアンナ・アマリア—化学の結婚?—、日本ゲーテ協会発行『べりひて』第51号、1-3頁、2010年5月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 貴志 (SAKAMOTO TAKASHI)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：10314783